二〇一四年九月一六日（参加者一二名）

夫恋ひの歌碑誦しをれば秋の声　菜々
星霜の万葉苑に秋を聴く　〃
日を吸ふて色深めゐる実むらさき　〃
甲山ベレー帽めく秋の雲　〃
さはやかや白檀の香の堂に満ち　ひかり
園児帽なれど目鼻のなき案山子　〃
秋澄むや進むともなき雲の峰　〃
秋草を数へ万葉歌碑巡る　満天
苑訪へど人影も無き残暑かな　〃
秋暑し万葉公園韮匂ふ　〃
風遊ぶ音の序破急竹の春　宏虎
黄昏の鶏頭いよよ妖気満つ　〃
秋水へ戸毎に渡す石の橋　わかば
万葉碑訪ひし山の辺薄紅葉　〃
子規虚子の師弟句碑訪ふ萩の寺　よし子
風吹けば葉隠れに見ゆ葛の花　〃
園児らの黄色い声や小鳥来る　つくし
慈悲塔のほとりに燃ゆる曼珠沙華　ぽんこ
里山に芋の茎買ふ吟行子　よう子
ひるがへる五彩のテープ豊の秋　はく子
バーベキュー囲む家族に天高し　〃
風あふちやまずよ谿の葛畳　〃
土手の葛手すりへつるを伸ばしけり　〃
高階は総玻璃窓や秋の空　〃

定例句会みのる選

二〇一四月九月16日（参加者一二名）